vol.429

mj "肥は肥力、肥は肥料、肥料はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2014年4月9日発行ラインナップ ◆
・三菱商事肥料部長就任のご挨拶
・薬用植物の国内生産拡大に向けた取組

三菱商事肥料部長就任のご挨拶

三菱商事㈱肥料部　西谷部長

２月１日付で三菱商事（株）肥料部長となりました西谷貴彦です。この度、前任の藤木洋が化学品グループGCEOオフィス室長に異動となったことに伴い拝命致しました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。私は1988年の入社と同時に当時の化学肥料部輸入第一チームに配属となりました。その後、二度ばかり肥料の仕事を離れた時期はあります（全社投融資審査業務、アンモニアプロジェクト推進業務で実質合計約５年間）が、これまでの会社生活26年間の内、大半は肥料で過ごして参りました。肥料での担当は、本店での輸入原料販売や関係会社管理業務に加え、後述の通り二度関係会社に出向した経験を有しております。商事会社の社員としては極めて変わり種で、通常私の年次ですと多い人では３回以上海外に転勤する人もいるのですが、私はこれまで海外転勤経験がありません。これは上述の通り、中堅社員になるまでの一時期、肥料部（当時、化学肥料部）から離れたために、要異動リストからどうやら漏れてしまったためなのですが、その分私自身は国内の肥料に触れる時間が多くなり、寧ろ会社には大変感謝しています。激変が予想される国内の肥料事業環境下、皆様のご指導を得て、これまで培ってきた以上に国内肥料事情についての理解と見識を深め、皆様のお役に立てる仕事ができる様精進する所存ですので、宜しくお願い申し上げます。

エムシー・ファテーィコム時代について

過去の経験でとりわけ思い出深いのがエムシー・ファーティコム（MCFC）時代です。2008年８月に三菱商事関係会社であったトモエ化学工業・宇部興産農材・コウノシマ化成・ダイヤケミカル・播州ケミカルの５社が統合され、MCFCが誕生しましたが、その際私は常務執行役員経営企画室長として同社に出向致しました。そこでの私の役割は、５社の統合を円滑に実行していくための旗振り役の様なもので、経営面での戦略・方針策定の他に、発足間もない同社の営業・製造・コーポレートの各分野における実務面の運用ルールや取り決めを作り上げていくこともありました。その以前に出向したことがあるトモエ化学工業にて、メーカーの仕事の流れや仕組みをある程度理解していたつもりだったのですが、５社間の様々な調整を要しながら殆ど全てを一から作り上げる必要があったこと、また（トモエ化学工業の場合とは）規模感が全く異なっていたことで、想定した以上の大変な作業でありました。その１ヶ月半後にはリーマンショックが発生し、それまでは歴史的な肥料原料価格の高騰に対して安定調達・供給対応に追われていたのが、一転して原料価格の暴落とそれに伴う肥料需要の急速な減退に見舞われたため、その後の１年は如何にコストを節約・削減して未曾有の苦境を乗り切るかの検討と実行に忙殺され、夜は会議室を占有してカップラーメンを持ち込みながら書類・パソコンと格闘する毎日となりました。しかし、新会社が苦しい事業環境を乗り越えて立ち上がっていく過程を一緒に歩んでいくことができたことは何にも代え難い貴重な経験でした。

今後の抱負

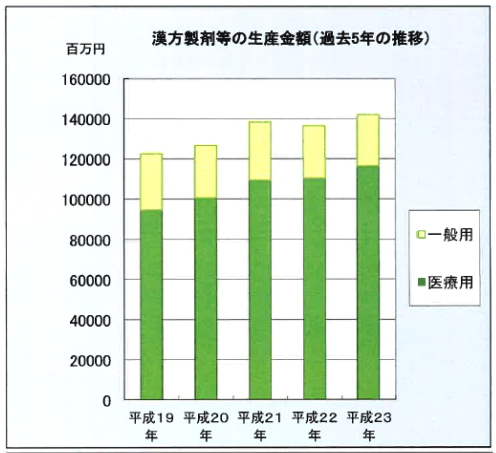
農業従事者の減少・高齢化や耕地面積の減少に伴い生産額の減少と生産基盤の弱体化を余儀なくされている国内農業を対面に持つ肥料業界は、需要の漸減から脱却できない状況が続いておりますが、TPPへの参加が実行されると益々それが加速化される恐れがあり、事業環境の厳しさが幾何級数的に増す可能性があります。かかる状況において、私共三菱商事グループは、元売のMACを通じ、MCFC・太陽肥料・清和肥料工業等のメーカーさんやお取引先のご協力を得て、競争力・付加価値力に一層磨きを掛けた肥料商品のご提供に確りと腰を据えて取り組んで参る所存です。一方、世界に目を転じま

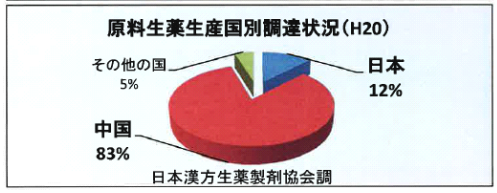
（次ページへ続く）

（前ページより続く）
すと、世界的な人口増とそれに伴う食糧増産の流れが一層高まり、中長期的には如何に安定的に良質で競争力のある肥料原料を確保していくかが必ずや焦点に上がると考えられます。私共としては国内のみならず成長する世界での事業プレゼンスを更に強化・拡大していくことで世界的な購買力を高め、国内に対してこのメリットを還元していくことを追求して参る所存です。

まだまだ若輩ものですので、座右の銘といったものなどありませんが、三菱商事の三綱領（企業理念）の一つに「処事光明」という言葉があります。「公明正大で品格のある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する」という意味の言葉なのですが、私自身、三菱商事に入社して以来、いつもこの言葉を大事にして仕事をしています。私の前々任者（本多泰）が以前肥料部長就任時にマックジャーナルに寄稿した際に、「正しい姿勢で中心を攻め、好機を捉えて真正面に飛び込む」ということを心掛けている、と述べておりましたが、スタンスとしてはとても似ています。その言葉を踏まえ、三菱商事グループと致しましては、真っ直ぐにお客様・お取引様と向き合い、真摯で誠実な姿勢で直面する課題や懸案に取り組み、納得性・妥当性のある答えや方法を導き出していきながら、お客様・お取引先様と共に堂々と未来を切り拓いていくことを心掛けて参りたいと存じます。三菱商事グループに対し今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜ります様何卒宜しくお願い申し上げます。

薬用植物の国内生産拡大に向けた取り組み





出典：厚生労働省

農林水産省は来年度から漢方薬の原料である薬用植物の栽培実験を公募により全国約20か所で開始すると発表。農水省が掲げる「薬用作物等地域特産作物産地確率支援事業」の概算要求額では4.7億円で1か所あたり数百万円の補助金を拠出する予定にしており16年度までには国内生産量を1.5倍にしたい計画となっている。今回の試験栽培により栽培に適した地域を選定、新たな産地形成を目指したい考え。漢方というと中国ほかアジア地域で栽培されているイメージが強い。　2008年に行った調査では我が国が輸入している生薬原料の輸入量のうち83%が中国から入っており（国産12%、その他5%）依存度が高くなっている。また、生薬の総使用量は2万273t（2008年調べ）であり漢方薬の使用量は拡大し続けている。しかしながら、中国は環境保全を理由として「甘草」や「麻黄」を輸出規制の対象としており薬用植物の輸入価格は2000年と比較して1.6倍に跳ね上がっている。日本漢方生薬製剤協会が2010年に行った調査では2008年度の生薬総使用品目248品目中、国産では89品目に留まっている状況。このようなことから国内で産地形成を行い栽培技術の確立化を目指し安定的な需要に応えるのが狙いだ。厚生労働省は農水省と連携し「薬用作物に関する情報交換会」及び「薬用作物の産地化に向けたブロック会議」を全国8か所で生産者と使用者とのマッチング会議を実施した。現状では国内では市場のような流通網が整っておらず漢方を主体に販売する大手メーカーと生産者が直接契約栽培を行うのみになっている。トウキ・シャクヤクなどは栃木や群馬、北海道で栽培されているが安定確保できる状況にはほど遠いようだ。過去には生産者が需要ニーズを把握することなく薬用植物の栽培を拡大し大きな損失を出してしまったとの反省がある。需要家のニーズを企業が把握し生産者と連携して契約栽培を行う必要があるのではないだろうか。

今号では、三菱商事肥料部長に就任されました西谷部長に、ご寄稿を頂き有難うございました。今後ともご指導賜りたく、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp